

医療法人 山下病院 消化器内科

【住所】愛知県一宮市中町1丁目3-5 理事長：服部 昌志 先生 【病床数】102床（一般99床、人間ドック3床）【内視鏡検査・治療総件数 10,700件（平成24年度）】上部内視鏡検査7,354件、下部内視鏡検査2,166件、ERCP160件、小腸内視鏡検査21件（カプセル6件、ダブルバルーン15件）、超音波内視鏡検査104件、上部EMR5件、下部EMR771件、上部ESD76件、下部ESD43件 【スタッフ】常勤医師6名（消化器内視鏡専門医3名、指導医1名）、看護師10名（うち内視鏡技師6名）、臨床検査技師3名（うち内視鏡技師3名）、事務1名 【保有スコープ】上部用20本、下部用8本、十二指腸用2本、小腸用2本、超音波内視鏡用1本



消化器分野に特化した国内屈指の専門病院として 地域完結型の先進医療と低侵襲治療を追求する

ESDの累計症例数は1,000例以上 消化器専門病院として低侵襲治療を推進する

愛知県一宮市の山下病院は、明治34年に内科、外科、婦人科診療科目とする尾張地方唯一の病院として設立され、平成8年に現在の消化器の専門病院として生まれ変わりました。消化器分野で国内トップクラスの専門医療を目指し、近隣施設と協力して地域完結型医療連携を推進しています。「当院の治療方針は低侵襲医療を患者さんに提供すること。ESDや腹腔鏡手術にはいち早く取り組んできました」とお話になるのは理事長の服部昌志先生。「ESDに関しては保険収載以前の平成15年に取り組みを開始し、中でも胃のESDでは600例以上の実績があります」。現在では食道、胃、大腸の3臓器合計の症例数は1,000例に達しています。「これまで多くの症例を経験してきましたが、幸いにも重篤な合併症は1件も起きていません。ESDはリスクを伴う手技ですので、施行医には確実に手技を習得して症例に臨んでもらいます」とお話になるのは、副院長の富田誠先生。PolypectomyやEMRの手技をマスターした医師を対象に、胃の前庭部に続き体部病変で基本テクニックを習得し、内視鏡操作が複雑にならない直腸病変へとステップアップするカリキュラ



理事長
服部 昌志 先生



副院長
富田 誠 先生

ムでトレーニングを実施しています。「具体的な切除箇所や内視鏡操作をマンツーマン体制で指導していますが、胃と大腸では粘膜の厚さが違うことを認識してもらうために豚の臓器を使ったウェットラボなども活用してトレーニングを行っています」。富田先生はさらに、「患者さんのケアを安心してスタッフに任せられるので、施行医が手技に集中できることも安全にESDを行える大切な要因」だと強調されました。

急増する大腸がんの早期発見を促すため 最先端の仮想大腸内視鏡を全国に先駆けて導入

「患者さんにやさしい医療」を掲げる山下病院では、16列 multi-detector row CT を用いたVirtual Colonoscopy（仮想大腸内視鏡：大腸CT）を全国に先駆けて平成15年に導入しました。「大腸がんが急激に増加する中、検査に対するハードルを少しでも下げ、一人でも多くの患者さんに検査を受けていただくことで疾患の早期発見に繋がれば」との思いで始められたそうです。服部先生は、「大腸がんは早期であれば内視鏡で治療できるがんの一つですが、検査を受けていただかなくては早期発見も叶いません。大腸CTは検査時間も短いので、大腸内視鏡で辛い経験のあった患者さんからも「とても楽になった」とご評価いただいています」とお話になりました。こうした取り組みが近隣の開業医の先生に周知されると、大腸内視鏡に不安や恐怖心を持たれる患者さんにも「山下病院なら安心して検査を勧められる」と評判になり、紹介も増えて現在では症例数が16,000件を超えたそうです。富田先生も、「内視鏡はつらい、怖いとお感じになる患者さんも少なくありません。

▶ 次ページへつづく

大腸CT以外にも、細径内視鏡やセデーシヨンの使用、ダブルバルーン小腸内視鏡やカプセル内視鏡など、患者さんの負担を軽減できる最新の機器や技術は積極的に導入し、地域の患者さんに提供するのが我々の使命」だとお話になりました。検査センターで看護師長を務め、内視鏡技師の資格をお持ちの坂口紀代師長は、「スタッフも皆胃カメラを経験しているので、患者さんのお気持ちはよく分かります。私自身も検査前日はあまり眠れないほど緊張しました。ですから、検査の間はなるべく丁寧にゆっくり話し掛ける、緊張して体がこわばっている場合はタッチングを増やすなど、自分が検査を受けているつもりで患者さんに接するようにしています」と、スタッフの目線で日常診療において心掛けていることをご説明いただきました。



検査センター 師長
坂口 紀代 看護師(内視鏡技師)



内視鏡室のようす

時間と手間を惜しまないコミュニケーションで 患者さんや地域住民との信頼関係を構築

医療の質の向上と維持のため、山下病院では患者さんとのパートナーシップを重視しています。患者さんに納得して検査や治療を受けていただき、そしてここでしかできない検査や治療に専念するため、外来縮小を図り医療スタッフの時間と労力を患者さんとのコミュニケーションに充てています。富田先生は、「内視鏡治療に“短時間で簡単、かつリスクが無い”といった印象を持たれている患者さんも少なくありません。確かに体に与える侵襲は外科手術と比べて少ないですが、内視鏡治療は偶発症のリスクも伴います。そのため、ESDを受けられる患者さんに対しては、質疑応答も含めてしっかり1時間ほどかけてインフォームドコンセントを行っています。昨年同意書も刷新し、専門用語は極力使わず、より分かりやすい言葉で具体的な内容を加えました。万が一偶発症が起こった場合にどのような方法でレスキューするのかなども詳しくお話ししています」とご説明いただきました。また、年に一度開催する消化器分野の市民公開講座などを通じて、地域住民に対する疾患や治療方法の啓発にも力を入れているそうです。服部先生は、「毎年継続することで、市民の皆様にも認知してもらえるようになりました。公開講座の開催が近づくと、“今年は何をするの?”といった声も聞かれるようになり、地域に根付いた病院としての重要な活動の一つとなっています」とお話しくださいました。

最後に服部先生には、「消化器分野では、日本のトップは世界のトップであると同じ。今後も国内トップクラスの医療水準を保つため、より一層努力していきます。いずれは日本全国から“消化器と言えば山下病院”と言われるような病院にしていきたい。そして、この地区に住む患者さんが誇れるような、お腹の病気については心配しなくていいと思えるような、そんな病院にしていきたいです」と、今後の展望を熱く語っていただきました。



消化器内科のみなさん